

キブツの

子供たち

(第10回)



- ▶ 出産に至るまで
- ▶ 出産前後
- ▶ 乳児の家での世話

M・E・スパイロ
訳・中村悦子

第六章

乳児期

胎児期の要因と出産

キリヤット・ユディティムでは、子供を生むかどうかの決定は個人的事柄である。キブツ運動を批判する人々は、少なくとも初期の時代において、両親たちは子どもをもつことについて、キブツの許可を得なければならなかったのではないかと反撃する。しかし、ハベリームは、そのことに関する決定は、常に集団のものであるというよりは個人のものだったと言って、この説を否定する。しかしながら、当時、多くの夫婦の間には、早々と子供を持つことに反対し、また子供は一人か二人に制限しようという暗黙の了解があった。このような決定は種々の条件に基づいている。まず第一に、パレスチナにきた移住者の中には、全く子供をもたないという、伝統から解放された思想をもつ者がいた。これは彼らの知っているヨーロッパにおける大家族制の反

動であり、また多くの子供たちに良い教育を与えられないことに対する反動でもあった。

第二に、そして更に重要なことは、キブツ創設期の開拓者たちの困難な生活条件である。食料の不足、適当な住居の不足、きびしい氣候風土は、彼らに、この条件下で子供を育てることは適当でないと確信させた。その上にキブツ自体の基盤の弱さは、不安定な雰囲気を生み、ハバリームたちは、この土地での彼らの未来が確立されるときまで、子供をもつことをひかえたのだった。第三の重要な要因は、家族の不安定さである。初期の「結婚」の多くは、きわめて不安定であるメンバーが「家族の如きものは全く存在しなかった」と述べているように——多くのメンバーは、子供をもつことは適当でないと感じていた。このような理由で、キリヤット・ユディイムの初期の時代、その出生率は低いものであった。

今日、物理的条件が改善され、家族とキブツの安定が達成されたので、出生率は増加の傾向をたどっている。古い家族の多くは、子供を二人に制限してきたが、新しい世代のサブラたちは、四人から五人の子供をもつだろうと予想される。ある看護婦は「彼らは待と

うとしません。結婚して、子供を生むという彼らの大事な仕事に没頭するのです」と言っている。

キリヤット・ユディイムでは、計画産児を実施しており、新しい避妊用具は容易に手にはいる。一部のキブツ女性も避妊用具を医局に要求しずらくて使用していないという情報を得たが、この信ぴょう性を確かめる方法はない。しかし、無計画の妊娠が起こること、そして過去においては、子供をもつ要求を阻止していた条件のために中絶が行なわれたことがあったことも知られている。

中絶は、今日次の二つの理由によって広くは行なわれていない。キブツの人々を制限する初期の必要はもはやなくなったこと、そして、イスラエルの医者たちは、ナチの手による大量虐殺に対するわずかな償いのために、確実に必要とする以外は中絶を行なわないという非公式な同意を得ているというのを聞いた。しかし、イスラエルにおいて、中絶は合法であるので、キブツの女性がそれを受けることはでき、現に時折行なわれている。そして中絶の事実も吹聴されはしないが、世間話で知られるのである。この世間話によれば、我々がここに滞在している間

に、二件の中絶があった。両方の場合とも最近子供を生んだばかりで再び妊娠したので、彼らは労働の日程をそのために再度変更することを希望しなかったといわれる。私生児を生むことへのそれが中絶の原因となることはない。キブツでは、私生児という考え方はないからである。キリヤット・ユディイムの歴史には、父の素姓の知られていない事例が幾つかあった。しかし、その場合母親に對しても子供に對しても、何らの偏見も悪意もない、とメンバーは語っているが、このことは観察でも確かめられている。彼らは他の母親や子供と全く同じにみなされている。

既に述べたように、夫も妻もいかなる経済的不安もたないし、子供の将来の生活について計画をたてなければならぬことはない。我われの社会で、これから親になる夫婦が直面するようなこの種の問題は、キリヤット・ユディイムには存在しない。

キブツの婦人の大部分は、困難も不平もなく健康な妊娠の状態にある。しかし、年長の婦人の中には、子供を生むことにも育てることにも困難をへてきた人がいて、キブツの医者は、このことを過去において高率の中絶があった原因だとしている。妊娠に伴う養生法

は個人によって違うが、日課に幾分の変化がある。妊娠八カ月迄は、仕事に変更はない。

八カ月を過ぎると、労働は五時間に短縮されるが、それは正規の労働配属によっている。しかしこのスケジュールは極めて自在であった、妊婦個人の要求と状態によるのである。

妊娠六〜七カ月迄は、食事に変化のないのが普通だが、それを過ぎると日に卵一個、毎食ごとに牛乳、少くとも一食は果物といった特別の補食がなされる。面白いことに、この補食は、母体の健康のためというよりは、胎児の健康のためとして表向き与えられるのである。キブツの診療所には、常勤の医師と看護婦があり、妊婦は自分の必要に応じて何度でも医学的生活と診察を受けることができる。

妊婦の養生にみられる何事もない様子は、妊娠についてのキブツの態度を知る鍵になる。「キブツの子供」が間もなく生まれる——というところで、キブツの態度はきわめて好意的であるが、妊娠ということとは「当りまえ」の状態として考えられており、妊婦はできるだけ日常生活を続けるようにするのである。更に妊婦は、自分のことは自分で気をつけ、自分が苦しいと感じれば労働をやめるだけの知性があるものとみなされている。ここには、

だから、何ら不安や過保護はなく、また気づかわしい助言もないのである。

母親は、陣痛がやってきたことがはつきりするまでは病院に入院しない。この病院は、キリヤット・ユディイムから二十分のところにある。彼女はキブツの看護婦か保健委員会のメンバーに伴われて、自動車かトラックで入院する。しかし、「妻は夫を病院でそう長いこと待たせたくないのです」とある報告者の言うように、夫は、家に帰って「休み」、出産後になって病院を訪問するのである。

この病院が建設される以前——キブツの初期の十三年間——は、最適条件にはほど遠い隣りのキブツで赤ん坊を生んだのだ。堀立て小屋の病院は、電気も水道もなかった。常勤の医師はおらず、医者は一番近い町から馬の背にゆられてやってきた。

自然分娩以外には、麻酔は使用されない。が、キブツの婦人に関するかぎり、これはそれほど重要なことではない。彼女らは苦痛を外に表わすことをしないという伝統があるからだ。彼らは泣き叫ぶことはしない——そのような行動はキブツ外の婦人の特徴だとされており、キブツの婦人は、泣くことは恥かしいことだと考えている。「町の婦人とキブツの

婦人はすぐ分かりますよ」とある人は言う、「表わされる自己統御の程度で」と。キブツの婦人の中でも、キリヤット・ユディイムの人たちは、非常にストイックだという評判である。「あなたがキリヤット・ユディイムの方なら、泣きませんね」と言われるのがなわわして、だから、キリヤット・ユディイムの婦人たちは、この評判を下げないように注意をするのである。一人の母親は、調査者に次のように語った、仕事の苦痛がとてもひどかったので泣きごとを言ったところ、その結果「ずっと後まで」恥かしい目にあった、というのである。

出産後、母子共に病院に五日間いる。以前病院の不足がそれほど差し迫っていないときは、八日間滞在した。病院は同室制度ではなく、乳児は乳児室にいて、医者と看護婦以外は誰も入室はしない。

病院にいる間に、親は赤ん坊に名付けをする。以前、名前は聖書や自然からとられるのが普通だった。しかし、ナチの迫害の時には、ヨーロッパで殺された友人や親戚の者にちなんで名づけられた。今日、サブラが子供をもつ時期になり、また再び名前を聖書や自然からとるようになってきた。

相互作用

七・〇〇一八・三〇(A・M)——母親がやってきて授乳し、離乳後の子供たちに保母が食事を与える。朝食後、夏期はボーチの寝台に、冬期は部屋の寝台にいる。はいはいの出来る赤ん坊は、テラスで遊ぶ。清掃、ベッド交換、保母の朝食。

八・三〇一九・三〇(A・M)——保母が入浴させ、着換えをさせる。

九・三〇一十・三〇(A・M)——母親による授乳と保母による食事。

十・三〇一十一・〇〇(P・M)——ボーチまたは寝室で午睡をする。

一・〇〇一三・〇〇(P・M)——食事。食後、おむつを換えてベッドに入る。

三・〇〇一五・三〇(P・M)——洋服に着換える。年少の赤ん坊はベッドに、年長の赤ん坊は天候によって、テラスにいる。

五・三〇一七・〇〇(P・M)——食事。その後赤ん坊は両親がつれていく。乳児室の内外で遊んだり、また両親の部屋に連れていく。

七・〇〇一〇・〇〇(P・M)——就寝。

十・〇〇一〇・〇〇(P・M)——夜間授乳をしている子には乳を与える。

——その他にはあまり口をきかない……ラヘルは水をはねかし、ゆすがれるときはよろこぶ……体をふいてやりながら、シュロミートはラヘルにもてあそぶように櫛を与えた、ラヘルはそれを口へもっていく……シュロミートはラヘルの着物を着せながら鼻うたを歌っていたが話したり遊んだりしなかった。

全ての乳児が同じ時間に入浴するので、一人一人に充分の時間をかけていられないということは考慮に入れる必要がある。しかし入浴のあとの着換えのときも含めて、話したり遊んだり抱きしめたりすることがなかったということは、他の保母たちにみられるより典型的な行動と比較した時に、この保母の場合目立ったものであった。この時間は、理論的には、保母が一日のうちで赤ん坊と積極的に遊ぶときのだ。だから多くの保母は子供の身体的要求を満足させるようなことを彼らとの交流の中に入れていく。遊びはその交流の副産物なのだ。入浴の時間は(午後の着がえのときと同様に)従って遊びの時として認められ、主任保母に言わせれば、ある保母たちは入浴そのものをゲームにしていることさえあるという。この説明は、入浴をさせなが

乳児は、いろいろな人たちに出会い、その人たちから多くを学んでいくものと思われる。その中で最もよく交流しているのは、保母である。

保母 乳児は母親の他に二人の訓練を受けた常勤の保母、半日勤務の保母、そして訓練を受けていない保母の世話をする。後者の人々は、常勤の保母が欠勤の場合に代りをつとめるのである。保母の日課は、少しづつずれていて(だから全ての人がいつも同時に勤務についているわけではない)、朝子供が目覚めてから夕方両親が迎えにくるまでの間、少くとも一人は保母がついているようになっている。早朝には三人の保母がいる、そして一人は午前と午後の早目まで、あとおそ番に二人が勤務する。保母の労働は両親が赤ん坊のところにきたあとにおわる。夜間の勤務はない。しかし夜番(シュロミール・ライラ)がいて、その人たちは子供の家から家へとすべての子供たちをみて歩く。一回の見まわりには、ほぼ一時間を要する。赤ん坊たちは(授

乳中の乳児を除いて)夜間はそれほど目覚めはしない。が目覚めた場合は、夜番の人が彼らをなだめる。そのほか毛布のおちたのをかけてやったり、何でも赤ん坊の要求に応じて行なうのである。もし母乳授乳中の赤ん坊が授乳の時間にはまだ間があるのにお腹をすかせて泣き出せば、母親を呼ぶこともある。

保母の第一のつとめは、世話をすることである。殆ど一日中、一七人の乳児の身体的要求に応じて世話をしたり、家をきれいにしたりする仕事に没頭している。受け持ちの子供たちに注ぐことの出来る愛情はこれらの仕事の中で与えられる。多くの保母は、この仕事を充分な暖かさと愛情をもって行なっているが、時には、赤ん坊に対してほとんど刺激を与えずにおさなりのやり方で行なっている人もいる。次の例は形式的な行動のものである。

『シュロミートはテラスにやってきて、ラヘル(十一カ月)を抱き上げる。ラヘルはよく笑う。部屋に入るとシュロミートは洋服を脱がせ、浴槽に入れる。ラヘルは石鹸で体を洗ってもらって、よろこんで笑う……シュロミートは、私にラヘルは扱いにくい子だと言う

ら、やさしい言葉をかけたり抱きしめたりすると同じように、よくお話をし歌をうたつてやるという意味で本当である。その結果、多くの子供は、入浴を楽しみ、それは彼らのほは笑みや笑いに示されている。

形式的な世話は、入浴と同様に食事を与えるときにもみられる。

『ラヘル(一一カ月)は十時のとき眠っていた。保母が食事をさせるためにやってきて彼女を起こした——彼女はぐっすり眠ってはいなかったが気むづかしく泣いた。保母は起きて食事をするようにと言い、隣りの部屋につれていき、ひざにのせた。ラヘルは、コップからごくごく飲み、途中たった二回息をついただけだった……保母は幾さじかを口に入れた。ラヘルはよく食べた。マッシュポテトと小さな肉団子を食べた……食べた後、肉を少し吐き出し、じやがいもも吐いた……(ラヘルが食物を十分に飲み込むだけの時間を保母が与えたのかどうか、私には確かに思えない)……食べ始めてから約十分後には、ラヘルはもうベッドにもどっていた。』

えなければならぬ現実、保母が一人の子供に充分な時間をかけることを阻んでいる。しかもなお、右に述べた食事の様子は、異常に早く、子供と保母の間にはほとんど交流がないことを示している。

今の二つの例に比べて、もっと暖かさと愛情あふれる二つの例をみてみよう。これらの例でも務めは迅速に果たされてはいるけれども全く異なる質があることに注目してほしい。

『マルカはグニー(六カ月)の着物を脱がせる——彼は笑う。彼女は「私が彼を好きなのを感じている」と言う……彼女はグニーのおしりをたたき、身体にキスをする……浴槽の中でグニーはこわがった。マルカはあつくないのよといって安心させる……すぐに彼は笑い出し、水をはねかえす……体をふいてやりながら、マルカは彼に話しかける。やさしい言葉をいうと彼は笑いかえす。話しながら鼻の上に物をおとしてやると、彼はゆっくりひろって……笑う。キスをしてもらってベッドへもどる。』

『マルカはギオラ(十カ月)を腰の上にのせて食事をさせている……抱きしめ話しかける

……彼は笑い興奮している。マルカはギオラが早く食べようとしなくて、ゆっくりしているという……彼女はギオラの名前を歌ってやる……マルカは「さあ、おわりましょう」と言っておしやべりし、歌をうたい、抱きしめ、おしりを軽くたたき……彼はよろこんで笑う。」

一般的にみて、保母は子供に対して暖かく愛情深く接している。子供の家にあふれている愛と許容の態度は、保母と子供の交流の機会が世話をする過程に限られているにもか、わらず、赤ん坊の高い満足を保証しているように思われる。それ故、もしある赤ん坊が要求不満を体験するとすれば、この日課にもとづくやり方では彼の要求がかならずしも満足されないのだということが第一の理由となる。欲求における個々の差違は大きいものである。それは一人ひとりが自分のリズムをもっているというばかりでなく、年少から年長まで一年の巾があるということにもある。しかも、その上で彼ら全てが同じ日課の中で順応するように期待されているのである。

施設化された日課の結果として最も多く起こる要求不満は、注意も与えられずに泣き続

けるということにみられる。理想的には、保母の言う如く、赤ん坊は泣き放しにされることはない。泣いたときには、保母がどうしたのかと見にやってくる。しかしこの言いは部分的には正しい、特定の保母と特定の子供には当てはまることである。主任保母によれば、経験をつんだ保母は全ての子供の泣き声を見分け、その意味を知っているという。だから彼女は、意味のある泣き声とその他のものを区別して、それに対処して行動することが出来る。しかし、それほど経験を積んでない保母の場合には、意味のある泣き声も、ある時間見過ごされて慰められることなく過ぎることもある。その上、さきほどの言いは、保母が赤ん坊の泣いている部屋の中にいる場合は正しい。しかし、もし保母が他の場所で忙しく仕事をしており、その泣き声が彼女の耳にさほど重要に響かなければ、何かあるのかと見に行く前に、五十分——またはそれ以上の時間が過ぎてしまうかもしれない。例えば、

「ロン（五カ月）は、保母がくるまで十分間も大声に泣き続けていた。保母がきて、うつぶせにさせると泣きやんだ……数分後、また泣き出した……誰もこない……五分もすると

彼は泣いたまま寝入ってしまった……ほどなく起きてまた泣いた……泣いて顔が真赤になっている……四分後保母がやってきて、あおむけに寝かせた……彼は泣きやみ、ねむりにおちた。」

「ヤコブ（九カ月）は病気で一人隔離されている……泣いて泣いて泣き続けている……誰も彼のところにいかない……ラヘルは彼は甘やかされていると説明する……十五分後、彼女は朝食を運んでいく……泣きやめる。」

これらの例示の中に、保母が赤ん坊の要求に応えるまでには、幾らかの時間をおくということ、また赤ん坊に暖かさや愛情をもった注意を与えるというよりは、むしろ機械的な扱いをするという点に注意をする必要がある。保母の忙しい日常をみれば、これらのことは理解出来るが、赤ん坊の情緒的欲求は満足を得られぬまま、残されることもあるのだ。

一方、保母たちは個人差というものを認めようとしており、予定の許す限り個々に扱おうとしている。赤ん坊が予定の食事の時間よりも早くお腹がすいて泣いたとすると、保母は早目に食事をさせてくれることもある。あ

る子は、人のいるところでは眠れないとすれば、一人にさせてくれる。例えば、レアはシユラに食事を与え終ると、彼女を自分の部屋に連れていくとした、というのは、同じ部屋に寝ているシモンはシユラがいると眠りを防げられることに気付いたからである。

両親 母親は一日に何度か授乳のために乳児の家にやってくるので、乳児と母親との接触は、大きくなった時よりもこの年の方が充分にあるということは留意する必要がある。更に自由の時間があれば、授乳以外にも母親は赤ん坊を訪ねる。母親との接触の第一がこの授乳の間に行なわれるからといって、母子の間の相互関係が、この乳を与えることに限られるものではない。この間に、母親はおむつをとり換えたり、一緒に遊んだり、必要なら入浴をさせたり眠らせたりもする。普通母親は授乳にきて、ほぼ四五分〜一時間ぐらい過こしていく。このようにして、乳児は母親と度重なる、親密な接触をしており、赤ん坊が見分けを示す最初の人が母親であるということも驚くに当たらない。

この母と子の関係は、過去には当てはまらないだろう。およそ十五年前までは、乳児の

家は病院とみなされ、そこには秩序と清潔が最高のものとして支配していた。母親は予定の授乳の時間に限り訪問を許され、母親が行ったときには、保母が既に全てのこと、例えば入浴しおむつの取り換えなどもすべてしたのである。現在の主任保母は、自分の役を振るまうに当たって、乳児の家は一つの家であり病院ではないこと、そして、母親はどんな時でも赤ん坊を世話することが出来ることを強調する。はじめ、幾人かの保母は、この変更に対して、これまで支配していた秩序が乱されるという理由で抵抗を示した。母親でさえも反対する人が幾人かいた。彼女らは保母が全てのことをしてくれろということになれてしまっているからだといった。しかも今日では、ほとんどの母親が、赤ん坊を訪ねて、そのときいろいろと世話が出来ることがよることであるのは明らかだ。授乳の時間を不当に長びかせようとするのではないし、「早くしなさい」と赤ん坊をせき立てたり、遊ぶことおむつを取り換えること、寝台にかえしてから数分間一緒にいてやることをおこたてその時間を縮めたりすることもない。

今日、父親も、子供が喜ぶときはいつでも訪ねるように奨励されている。しかし授乳中

に部屋に入ることは、その時に乳を与えている母親の態度にかかっている。夕方早く着いて、父親が子供に食事をさせる機会、それは程多くないということもあって、父親の唯一の役割は子供の遊び仲間ということである。一般的にいつて、父親は子供を抱き上げてゆすったり、妻や他の母親たちと子供の特徴を話したり、子供が成長して次々と成熟する有様を誇らし気に話したりして、子供への関心を率直に表わす。この関心や子供との交流は、子供が新しい技能を身につけるにつれて多くなる。

仲間 赤ん坊にとって変らない刺激の源泉は仲間集団である。彼らは一日中共にいて、同じ時間にねむり、同じ時に食べ、同じ床の上で遊びまわる。こうしてお互いに刺激し合うのである。赤ん坊たちは、五ヶ月になるとお互いを区別し、各々を識別するようになる。相互に眺め合い認めたことを、笑ったりぶつぶつ言ったり手足を振りまわしたり、さわたりという特定のやり方で示す。もちろん、この認知は年と共にまいていく。次の観察記録からの例は、赤ん坊集団内の交流の一つの典型である。この例は、テラスで起こったも

ので、寝台にいたのではない。

「ウジイ(十カ月)とヤコブ(九カ月)はボ
ーチにいてお互いに見合っている……ウジイ
は手を伸ばしてヤコブにさわり、手をつかみ
合い、おしゃべりをする……ギオラ(十カ月)
は腹ばいに寝ていて、そこにアミール(十一
カ月)がはつていき隣に腹ばいになる……ギ
オラは彼にさわり、二人は互いに手をふり合
う……ラヘル(十一カ月)がギオラのところ
へはいっていき、彼のそばにすわって眺める、
指で鼻をつつく……ラヘルが頭を床につけて
いると、ギオラはそれにさわる。ラヘルは彼
をじっと見る……彼は指をしゃぶる……ラヘ
ルは指をくわえる……彼女はすわりなおし、
ギオラはラヘルの手に近づいて、それをふる。
手をまわして彼女の頭と腕にさわる……ラヘ
ルはギオラからはなれてはっていく……そし
てアブシャロム(十一カ月)とアミールのと
ころへいき、彼にしがみつくと……ヤコブは、
はつてギオラに近づき、さわり、その手をつ
かむ……ギオラはおしゃべりし、ヤコブの足
にさわる。ヤコブは、はつていく。ウジイは
ヤコブに近づき、すわり、お互いにさわり、
感じ合っている。」

赤ん坊たちが集団に適応するようになると、
彼らはその中にいて安心し、そこから離され
ることをいやがる、という事例が多々みられ
る。例えば、夕方おとなたちが乳児の家に赤
ん坊をおいていくときも、彼らはほとんど泣
きはしない。このような行動に対して、集団
の存在が少くとも一部は力しているというこ
とはあり得ることである。

赤ん坊たちは、仲間と共にいるとき最も安
全だと感じている、ということは他の事例か
らみえる。彼らは集団から離されることを
拒む、たとえそれが乳児の家の中で他の部屋
へ一人連れていかれるときであろうと、両親
の家でそうされようとしても拒むのだ。ある
赤ん坊は、自分のベッドが他の部屋へ移され
たのを大変怒って、乳を飲むのを拒否した。
集団の仲間が病気にかったので、少しの間

両親の部屋にいななければならないようになったある
子供は、ほとんど泣き通して、両親を部屋か
ら出させようとしなかった。この行為は、彼
が乳児の家へもどると共に消失した。更に、
自分たちの寝台が並べ換えられて、それまで
よく知っていた赤ん坊と近くでなくなると
きも不安の兆を示すことがある。

集団に対するこのような愛着は、年長の乳
児(十カ月またはそれ以上)によくみられる。
彼らは自分たちの選んだ内集団を形づくるよ
うになる。そのお互い同志が最もよい遊び相
手であり、そして彼らが社会集団としてみな
されるような一定の範囲内で遊ぶのである。
実際、一カ月もちがわぬ年少の子供でもそ
の集団の仲間になるのは、むづかしい。他の
仲間と交るようには彼と交らない。だから彼
が完全に受け入れられるには数日間を要する
こともある。(つづく)

(7頁よりつづく) それも奪ったものは必ず奪われる、奪い合いの経
済界では大半の人が空しい一生を終るのが当然である。キブツ人は
みんなのために働くことにより、個々人の幾倍にも成果がある。
それを分けあつて生活するから一人の落伍者も不幸なものもない。
老後の安定も100%保証付きとなる。本当の福祉社会、それはキブツ
を真似るより外にはない。資本主義国の福祉国家、そんなものは、
選挙の時の票かせぎ文句にすぎない。だまされないことだ。(つづく)

協会日誌

1月6日 仕事はじめとやら
で恭子が料理をつくり手塚さん
が日本酒を買い、われわれとし
ては珍らしい酒盛り。允士、目
のまわりを真赤にしてしゃべり
まくる。今年は、われらの根拠
地農場づくりを真剣に模索する
年にしたい。

1月7日 自由学校コミュニ
ンの生残り(?)の高橋さんと
横森さんがきて、「何か今のアイ
マイな状況につきささるような
ことしたい。」とこも話す。

1月8日 雑誌「JINTA」
を編集している人くる。野本三
吉さんが宗教共同体「大和山」
へ行つた体験を話してくれる。
高い質とエネルギーをもった集
団だという。

1月9日 直彦と允士はキブ
ツ帰りの友人の赤ちゃんのため
に献血にゆく。

1月10日 原康男さんがきて
共同体とか山岸会にかかわる三
十才前後の年寄り(?)の話し
合いをやるうと提案。少し射程
距離の長い活動計画について話
したいとのこと。

1月10日~15日 第九回キブ
ツ研修生グループの第二回合宿
研修会を、東京代々木のオリシ
ビック記念青少年総合センター
でおこなう。約五〇名の研修生
が参加し、協会の四人のスタッ
フと奥村久雄氏が世話係。ヘブ
ライ語学習、話し合い、講義など
で毎日過ごす。

1月14日 久しぶりに「ぐる
ーぶ・もぐら」の土竜くんらく
る。着実に共同生活しているの
がうかがわれる。女性メンバ
ーがもう少しほしいという。研究
会活動も充実したいそうだ。

1月15日 夜、キブツ研修生
Aグループの人たちきて、奥村
さんにヘブライ語習う。この夜
は、別の所でBグループの会合

もあり、允士が出かけてゆく。

1月16日~20日 哲、香川県
の東山産業で開かれた全協連の
会合に出席。全協連は、共同体
運動の新たな分野をきり拓きつ
つあるといえよう。(21頁参照)

帰途、岡山県のある備北
共同体を尋ねる。(22頁参照)

1月22日 久しぶりに加島宏
くんくる。彼が建てて今ばくら
が管理している秋川の家につい
てなど話し合う。この日は、中
村悦子さん村上宏一くんなど十
数人の外来者がある。

下山弘至さんが精悍な顔をし
てキブツから帰ってくる。彼の
活躍に期待しよう。

1月24日 前回のキブツ研修
生の引卒世話係としてイスラエ
ルへ行つていた中村一郎くん、
帰国して、いろいろ報告する。
彼は、奥村久雄さんとともに、
今回の研修生の世話係として、
再度イスラエルヘトロンボ返りす
ることになっている。この日の

会合で、今回の五つの受入れキ
ブツを正式に決定する。

1月25日 F I W C 関東の阿
木幸男くんくる。日常のごく身
近かなところから根元的な変革
にとりかかってゆきたいという
彼の意見、興味深い。近くアメ
リカのコミュニティンへ行くという。

1月27日 山谷の活動家Tさ
んに会う。学習と自発的労働の
場として「労働者農場」のよう
なものをつくりたいという。三
年間山谷に在るといふ彼の姿勢
には無理がなく柔軟だった。

1月28日 長野の自宅で自動
車運転の練習と過疎村の調査を
していた直彦、久しぶりに帰っ
てくる。前途多難だが可能性は
いろいろありそう。

1月29日 協会のスタッフ五
人と手塚さんを加えて六人が、
はじめて顔をそろえた日。運営
会議で仕事の確認をする。

1月30日 北邦彦くん、労働
者による「占拠」について話す。

製作部メモ

▽ますます生きにくい世の中になってきたような気がする。末世とでもいうのだろうか。人間らしい創意や連帯の暖かさをおさえつける巨大な力が働いているようだ。人間と人間、人間と自然の親しい間柄が分断され、それぞれが孤立させられたまま支配されている。へ社会ファシズムとでも呼べる暗雲が、ぼくらをおおう。今こそ、ぼくら一人一人が固く身につけた既成観念のヨロイを脱ぎすて、素朴に生きているありのままの姿に立ちかえろう。そして、あふれる創意で、逆に支配のアミを分断してゆこう。——テツ

▽弱い人間が自分の弱さをまざまざと見せつけられるのは、自分の置かれている環境が耐えられぬものであり、そこから抜け出す術も勇気も持ちあわせてい

ないと知らされたときである。いくら言辞を弄して情勢を分析し、自己の立場を深く認識しようとも、立ちあがって第一歩を踏み出す勇氣と決断力がなければ、彼は永遠にその不毛な苦しみから脱却することはできない。

救済は彼自身によってのみ可能であり、何もできなければ希望のない生と無意味な死が横たわっているだけだ。——尤士

▽一月下旬から制作にとりかかったので、原稿が思うように集まらなかった。もつと前から予定し、充分に練り上げた雑誌を作らなくては、読者に済まぬし僕にも不愉快だ。

二月下旬また帰省して、運転免許の試験を受け、長野県各地の過疎村を歩き回ることにする。調査をしたいという仲間もあり、巾広く、深く突っこんでゆきたい。調査するだけでは不完全だ。プラスアルファ。——ヒコ

へ会計より

■郵便料の値上げ、その他のさまざまな物価の値上げ……わが日本の経済はわれら庶民を苦しめるのに余念がないようです。お金は人間が考え出した最も有効で高度な拷問用具のようです。でも、ぼくらはこの拷問をくぐり抜けて、当分誌代の値上げはしないつもりです。そのかわり

もつと読者を増やしたいのです。協力して下さい。

■また、今のところ、定期購読料が切れてから四カ月したら雑誌の発送を打ち切ることになっています。今読んでいるみなさんは、ぜひ継続購読して下さい。いい雑誌をつくってタダで配るというのが夢です。この夢を実現させる経済機構をつくりたいものです。

■直接購読(入会)のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者(キブツ会会員)によって支えられています。1年間(12号)の会費は入会金とも2000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書きそえて、送って下さい。

■東京=新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
大阪=曾根崎書店、ウニタ書店 京都=京都書院 札幌=富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台=八重州書房 盛岡=第一書房 福岡=九大生協 富山=清明堂 名古屋=おぼた文庫 松本=遠兵ブックセンター

■印刷所=創土社 東京都港区芝5-16-13
電話 452-0501・6069

月刊キブツ 1972年3月(通巻96号)

頒価 150円 送料16円(1年間2000円)
東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイ
ツ10号 日本協同体協会
電話 370-2813 振替・東京 24403

生きがい

●感動の人生記録

手塚信吉著

A5判上製・700円
(送料110円)

平凡人の体験記録にすぎないが、永い七十余年を文字どまり精一パイ生き抜いてきた足跡を、日誌に基づいてまとめたものが、この『生きがい』である。時代は大きく変わったが人間の本性が変わりはないので、境遇を同じくする青年諸君には今日でも参考になるであろうと確信して、誇張も虚飾もなく正直に書いてみた。……人類は共同体なり、協同協力の中にのみ個人の安定も世界の平和もある。……(序文より)

日本の共同体

●一燈園/心境農産/前森山集団

農場/ヤマギシズム北試/東山産業

A5判・二〇〇円(送料三五円)

日本協同体協会

東京都渋谷区代々木4-5-14
振替 東京 24403

■次の書籍は、本協会で販売取扱いをしています

生きがい

手塚信吉著

日本協同体協会/頒価・七〇〇円/送料・一四〇円
日本の共同体 手塚信吉・草刈善造著

もう一つの社会キブツ H・D・ドラブキン著/草刈善造訳

大成出版/定価・一〇〇〇円/送料・一四〇円
キブツ——その社会的分析 誠信書房/定価・三八〇円

山根常男著

キブツの教育 A・I・ラビン著/草刈善造・奈良一三訳
大成出版/定価・一六〇〇円/送料・一四〇円

篠原睦治著

キブツのこどもたち 誠信書房/定価・一二〇〇円/送料・一四〇円

西本とみ著

キブツ・戦争・オレンジ 芙蓉書房/定価・五八〇円/送料・一一〇円

アグリリングス H・ハルベリン/飛田徳三訳

大成出版/定価・一七〇〇円/送料・一四〇円

ユダヤ民族——その四千年の歩み 誠信書房/定価・五五〇円/送料・一一〇円

小辻誠祐著

誠信書房/定価・五五〇円/送料・一一〇円